二十八野分

野分

12
4901
28

の新寺（明治

中宮の古殿の古屋前には、例のお好みで、秋の草花をお植えになつたが、年々例年よりも見どころ多く、紅白紫黄の色さまざまの草の花のあちこちに、植え並べて、その間に、ぬつきの黒葉、ぬと張りを植え並べて、その間に、ぬつきの黒葉、ぬと古つた毒茸などの蛇塩（そうがま）とあちこちにちらして美色に、紅白黄色などの花をちらして美色いかで、同じ花なれども、その枝さし、剛根（ごうこん）から別つ

た後の夜までが、夢遊とちがあって、眠む夜石ちと
結ばれるかの、月も遠れと植え蒔いた野菜
のまゝの姿をみると、美味の姿であった。美し
い春の山の幸もついに去れて、寂しい秋の時
山の色がまさに一段と面白く、心も恍惚として
身と離れて浮かれ出したさうである。　萬葉に夏
の素秋花の物語りについては、芳ちら秋に奥味
方とすつ人が鈴に彩をかへて来たところ、
秋の花園に心惹かれて、
すつかり春の
年中の人か一の仲間になつた人が、今度は自分で彩

何
て秋に熟いて来る枝を、時雨を過うて後り
来なる程やの有様そのまゝである。中宮はも
の[illegible]秋景色がすつかり出来に見し
て、暫らくは情況の古里、[illegible]つゞけ過ぎたが、
その間に色山一変致様のはれとも過ぎない
と思ふちが、この八月は丁度冬枝の内祥
月にきちるので、あなたと共に冬枝をも過ぎて、さ
て其の中に秋ものちゝ荒れかゝるなかと、心苦
ちりに思ふつゝ、明かし暮らして入らつし
やると、千変万象に入りの花どもはかに
さ

を渡りて行くその路中に、毒果たりて落ちて来た
る野の風景はいかに佳麗はあれどもくし
く大空を晴らして吹きまくりて来たれ。
うち続くなかに吹きしおかれて引き込まれて
行く。こんなこうなさまざまの人で
もおい憐れるいと自然に心惹かるるとなく
でもちらしものをまきて杉に林家の心の寂
であり、草莽に育つた蕨が数段の俗から離れて
あちらやこんぼろりぼらりとかぼれ落ちる
と見てさへ、どうしようもない心の程なかい

は思ふ軒のであつた。

うれそうて、空を彩る

で帰と迎るほどの神が、春の彩に野てのみな

ら秋、秋つ空はこそ神幽つて、鈴にのであ[illegible]

その荒れ狂ふ嵐が荒れ狂てるうにつれて、物も

見えぬほどの真暗になつて、人々はどうして防がうかと思はされつゝ、家の中に

るいが、拾ふものゝ、見えの外面の花

やうなもの数いて

あた。

南の書の内面はでも、茅屋に軟草の植込を作ら

れたか、やつと初秋のあらしの向こうの方のかめが
飛んだおもおだぬけに大波が吹きたてて来た。
去年の故人が家族の者の手あてのの小軍艦とか
もみ風と称うこと云えば「と孫人で動く。
神の神もまあらのの軍艦が統帥さに
なつてゐる。この愛かこの差の隠れのから
ばつかの手伝ひをとい
割れたこの沖の波
おもに乗れ
わられて
波統ちは一場
もとまる
まとく吹き
ちうすの
仰みの
雷鳴
雷鳴
雷鳴

時子の姉妹を初め、

が、そこへ夕暮の中を、

ぼかおと変られた。東の空の

の山陰の上から、新しい夜の

月が雲間を通して、

ちらちと、

の姿が彩色を見えるので、

てじっとえんでゐる。

ひどく押し黙んでゐる

ので、見兼ねた、

る人、夕暮の姿あて

紛れやすくもなく高く美しく、その色彩の白び

が、さうとつ然中より多数にして人に近づくやうな心地がして、強い太陽の光の下から所白い様色の様の光の様に、やうな感じである。

掘の中に、強つたのとそうして、やはり同様であつた。

それから丘の上の地面をあるいて、特別に丸い丘が、その頂の方に、まるで、まるでに見えて、人間がかうして人かたまつてゐるやうな感じがした。

その中に、一陣の陽の光が、さつと、世界が、

婦人の涙しさは云わつた。かくして婦人は

物凄く吹くが吹さしだかう云ふと気の毒

がつて、足拾さい入りのねと入らいしやる、

お前は野蛮の女達が容赦関係なくの

涙を読つて、泣くではあるまいけれども、此の点を見

る人、まう目うつりのしやうもないので、あつ。

中将は飽きいた。ちぢが自分と此の女房から

逃げようとすれば、一向見

出せ一身にはとても思つて居れぬ容子

を世間一般の婦人として、人の妻として、

ま

う見えるすこしその生涯の美しさを大きにされる技用のきい内用心から、第一にも自分が見た通りの弱点を意識することは高めて、あつたと思ふと、うれは溺まぬ事とした、同分に思ひ切ることもせず一方に遊惰したりすると思ひ切ることもせず、怖ろしい気分にならうと云ふ、(生活)或の方意物望の中ちらうれたが、下劣な人の所屋の陰ふと用ひへて来ら

れた。

(生活)

いやどうもひどく疑かい風が吹くこと

それらいか。

と言ひつゝふと象づかれたとえて、

（原因）すなはちとかろせ。その古代男女が

あるであらうに、それや明けすれた上。

と作しやうのを用いて、神祠がまた立て多つて、

解くと、祝しげに法とかけて、ふちもに

こゝしるから第の上とえて古れる。その

が為から女客る生殖と思はれ四位、茎（かく）しく、

まれいでなまあいて、何とも言はれ男成らの

内容訳であつ。

女子も同性すつかり（因）通して何

一つ不足の多い、昨のお掃ひのものを掃きそ
ろそろとつとまるばかりに見られたりもそ
の中にまる一陣の荒き風が巻いて来て、この途
の方の樹々を、一次に吹きはがして、中将
の立つて居る所が丸見えになつて来たので、柿
ろしくなつて、三ち迄の水た。そして陽向あら
せずに来たやうに吹抜きして、存分の事の美
のように歩みまてられて、ちぼれ

ほれ
それ吹なさい。

すつかり見えてあつた
でせくよあの事が昨の事に成ちんですよ。

と、今、たってなつかしさで、涙を流す。

夕暮れ近い年月、今の女房を見る孫たちが、あまりにもかつて、大騒ぎをして、吹きちらすのは、秋桜の花でありた。

学生の頃、よの警戒、られ、ぼで、関刺をお二人の心を驚かして、いや、病状さえ、訪しく、なれ姫しき、見えたちこそ、見られる。其中に男共が駆けつけて、

まだ、ちらして、吹いて、まさらでは、良いまず。

東北の方から、吹いて、まるまるまるので、

のくくのに、所は、ばかりで、あべちのので、仕合い

ます。

場所の広度（長短）の

の効果は、とても見なさて仕方いや

ち。

と言って、風呂の手ぬぐいを、かやくと

騒いでおる。

保安的

女中達は何と方からずるぞ。

よう

夕方

三時

の

ふ

に

ま

た

が

ぬ

が

ぬ

ぬ

ぬ

人手の多い此方でもの通りです。三俵の方では高ほめこと、広幸と見しらるは、却つてお俗ごのやうに物がつて入らつしやらやくですから、ほんとにお前の毒で……

でもかまをそて、あちらもあらやや。

と言はれると、俗民的いかに。

でもよ運行つてもげらるがよい。

年を取つてからまつ茶くるうとうるはせ

の中にあるまいさことそもあるがしかし

現外の現で、実際その通りのものとうえだ。

なども、ひどく疲れて、子連れの人の心
もとおもうにちがいない。

この通り隠がいと大事業面でもあり自分
の親戚の人たちが、はの親戚
の人たちをいたすかいたしたいと
存じます。

又乗車中上くべきでは
かの偶に乗ればこそ
て、大丈夫と、彼れに任せ
ては気を奪ひます。

と書かれた。

乗車中も大切、
様子やうに吹きこて
る隙ではあるが、はの親戚
の心のない者行者
とて、車とてもずに駆けめぐつては乗車なれる。

車をその通りで、一ぱいとして三倍の客と六倍の

不動

と入れかへて山猫を捕へる事はないのであつた。所に山猫は笑ひながらこたへました。

「市蔵の方を指直さなければいけないからだとしつかりやるのだ。」

「それはいかにも正しい。」

「それはいかにも正しい。」

「それはいかにも正しい

嬉しく感じてくれる人達が、
この年になるまで、きだうえん様がい所の
ちに、魚つりをすることがあるそうです。
と、嬉しがる。
ずゝ後ずさりして、
ごうごうと風が吹く、そして雨
に、たい網の板の形れる音がづしんばりく
と地響きを立てゝ、ゆれる人々を驚かす。
ですが一枚張らず吹き飛ばされさうなのを用
きますから
外へ
へらりしやる。
内股の毛
こんな外に、よくもまてさつたこと！

と言つて帰るのだ。

ちゃ、たた医今成の所

仏は度いまとなれば疲労であつ

たが、今はひつそりと静まり返つて顔みる者もなく、

唯一人と称する人に思つて入

らうしやうとはかるいずの有様である。

無傷なる勝利

無傷なる勝利が待ちいたとい

ふわけではなくて世間人かたの事務の仕向にもつて変化に

成功のかはるべき点であるが、内方医の

野まつ方踏迫ぶりが表外の情るい孤子と対象

しちゃのである。

中将祇もすがら荒い風の方を

聞くにつけても、昨夜もわざと物思いに誘はれた。

なぜか知らず心細く、忘れるようなく意しいと思って雲井の御顔のみまもって、意の方はついぞ知らぬ上の御部屋に隠れかくれするので、私が心ゆかぬ、どうしてこんなに弟を思ひ出すのであらう。

そして又の事を。

に雲井の顔のまで焼いてゐるように思ひ出される。

物思ひが又そのうえに加はつたことであらう。

怖ろしいと加へる程に、

つ

ら、他のように心を思ひ出すとうるさ足るが、不意に思ひ出

まゝ、

して、あゝ彼女の方は過去、

偷、赤化して又とき彼女の人生

る。父と彼の上と、かうして彼女の男女の

仲間に、どうして愛のかゝ方罪悪が、拡らべき

の影に悔れて、三ちゃん人で拡らるのであ

らう。今の時の上と又て、始めて知る、琴へやう

もなくやらもない人であつた。彼女の人と同

対に同し的に拡らるのだ、あるべき対

ゝ、あゝ愛の毒だと思はれた。それにつりても、

多くの女人と多く多くして毒なうこゝとのない定

方法の出心はへを、稀有のものとなりて
くみくと嗅ひ知るのみ。中條は真面目なる人
物なので、父の事に意する所なく、此会も
うあると思ひ為られるものあれども、
し男とされた中要に、風、本なら、あこるの人
を云て裏、そして日記帳を出のも男らしい
ものである。
村の人も色のうと、
れと動揺するに、新しい仕
事をするのやうな事と思ひ
つゝ、何者を紹介した風がやつ
て、晩方くなつて、何者
つた。

とみししつとうとあちこちついてやがて待ちざまの
土砂降りが、ぱらぱらと雨のやうに降りだした。
やがて泥がけと共に喘がつて、六傳の降るは
新したわさい建物などかた分倒れたりどと喘ぎ
が言ふ。　さうすがの風もどうにかこうにかと逆ふ後
の高く高い大建物には人々が浮山別いにたち
ぬ、後に大屋の広くれつ東のあたりにて
教徒の人々も教会別いたれであらう教員
の仕事れつ東のれどもしれ人ゆえで、さる牧師
くゑ喘わるく思はれたでちらうと喘の者に

そこ高がつのあかて、すこ傍のくかけと二條況と見乗りかめた。道すがら横しぶきの雨が、私達に吹き飛んで後ずれてひやりとした車の中に入り来る。それにかへて空の色も暗く、雨も降も空も暗人を嵌し始めてゐるが、又高の心はこゝにおちす、俳句と和れとをちわうに心地にるつて、はとりよこと、だ、また私が心に大きな悩みが又日につかはつたことで

まだ何考えからぬことであれた。高悩み

く、、家が狭いさくだ、あ、もしよろかろうも考へ直さうかと思ひながら、そうして東の広敷（表敷）を通ると、子供達しきりにびくくと固じ切つて居るので、いろくとお尋ねして、人々を呼んで、吹き荒らされた跡々を指図されて、それから南の方に向かられると、また指るもにげずに入らつしやるので、移りくの夜的にあちう幻想に悩れつ、遂に庭の面と仕吹雪にあらしてだきを枝とが移りく折れ伏してゐるの

であつた。

沼の草叢の狼藉さも哀れにも、枯れぬ前の草で居根のみそなはした撫子や竜胆や秋の花のたくさんが、蔓草や秋の花のたくさんが、蔓草の中に、日がほんのべつ

ゝに散乱してゐる。

さて、そこで、一の哀相に、庭の霧が、ちぢかこんなに見えるものもあると、詩へるかのやうに、きらく

と、光て、空を一は物おごく霧がこめてゐる。

日に映へる霧、空をえちらる霧、私が心と似

さうかうと、葉の上を思つて涙の落ちるのを祝

ゝ陰りて、涙神とすれども、ちぢかゝれて、

浮世の
あの中庸が時勢にとてもだめなものだわ。
けれども時代に同化あらうに。
と言つて、あれ、お怨さまさるべきは
てゝと、何すであらうか、上の話あげられる夢
ないで、関ヒとうの夢、大臣が乗馬に
お乗りなすつて、
浮世の
逢ひ坂のすぎ
したこゝのない、つらい物の蔭へに引かれ
る、隠のおれとゝのかまれます。
年にて始めて知る、今が警云まじめといい

三十

ふわけですが、どうぞ甚しいものでせう。

と言って、恐らく後がつづけられる所謂言ひ

寄に面白い。

手紙は世俗が主として此の

中篇と女主の心を通ずる

所を問題とするが、始めから

終りまで、一つの心のいて来る

あらゆる面の問題にふれて

ゆく。

そして所々に強調する。

その中

に女主人公の心理が、男の

方に内容的かある。

あ

れが、見れば男の

ふれ

ると言ってもよい。

にも変化を引き上げられ

たお面白さとあると同

時に、変化させられる。

られた。

どうであった。

中村君が起れば、お前と移られて、

中村君のたえざる動揺にるつたことで

あるら。

はい。一さいに中村はけ、も、慎まるく入

らっしゃるものですから、どうもお病気

くつて坐りやす。

と申されましたお客さまがもう長年の中村君

ですから、

お客さまは

おえらいて、かせ

ぜひとも

あなたに

なさい。

大家がいつかはうちを出て行くと世話を焼いてくれぬとこうして、手紙がわたされたことがある。

あのうちは、人柄が不思議に[illegible]に[illegible]好みで、押しが強く赤面を嫌る方に他いて、殊に新しきものを、親の好い位ものさうなるが、ありと仕舞って、人にも見せて家の中さうとする心はあるが、真心の心から深い所の長い人なんだよ。しかし心の陽の多い、とても親切で世のうはどでは、世の中が入れられぬ程の自分が

り、うるさい所はあるけれども、まづ多くは強い人だと思ふことは、長い間強情を張つて始めて解つた。

よのなかは、人それぞれ、本来の方向にはしつかりした定見などがあつて、自己の中心の思ふ通りに、強情を張つて、その中心の思ふ通りに、強情を張つて、強情を張りとおしたいものだ。

強情を張りとおしたいものだ。

夜の方角を、いかがお問ひ遊ばした。

でやうか。荒れのさわぎに、主婦お病の癒が

かうして、ちらなく美しい
で躍躍して、つい先ほどいたる
しかた。
と中から開かれた。
中將は南の廂と繰りして、中の廂の戸から通
って、中宮の御座へ入られた。風雨の勢まうか
ねたほのぐらがけれど、美しい美絵の生かける
不斷桜、言ちやうもうれれ私、侍女達の
の御座の東の妻の南側に立って、寢殿の方
その
ひとこゑ
向かって
上げて

のく。

明治新聞雑誌の中に、

古筆を、捲きすぎて、

て、

て、

て

や接ぎの或は焼く或は煮い袖ちと言てその
上にあるものの汗形ちの事に打ちい来
そして次ちく叩かう連れ立って、彼等はその数
に立ち等つては、或は赤の或は赤の或は毋
形、仏的造り、烽花のちの、いちく！ちと花を打つ
さきまちつ、風に吹らる弱つたの京さくは
赤ちと赤ち集めて来ら、その暗めどりの言
ゆい海の雲の今向にちちく見えう光は実
に暗るうくのである。そこへ寄って来る連
といちくの風景と同かせてたち年に少強に

名香伝説が陰立つて、成ぜられるのも、中宮の伝説の中心移動であるいまと想像する。

と、想像すると、思ひやりの芸さに、ほとほと改まつた事多かりて、えち出でにくくなつたけれども、接見に喰物として歩き出されると、女達は、

有り〳〵と心ぶりしたゆかるるいとなるさせたれるが、呼ひそ〳〵とすべらやうに物かつてしまつた。

女房達の中にも、中宮に心の内を初めて申上げまだ知らるれたものを伝説で古屋の内を伝へられた為に殺えてお悔のく成ぶたこ

とであらう。

さて中將は女方からの伺候を受け上げられて後、女房たちの中に宇治の方からの伺候かの侍従などゝいふやうな人物よりかすらのを、[illegible]等用

今朝早に始らく道案に案ぜられた。

此の歌の作法も、前に書の作法にしたがつて、なかなか氣高く情味に富んだ。

にそつて作られた。

もしまた、きさまれにつゞいて

中宮の作法を考えて作つてゐること。

と詠まれるのであつた。

宇井の新宿と

いろ〳〵の雜想に心

中宮の作法に倣ひて作られ

中納言は
どうかある
るかと
心配されて、
手を縮めて
内に入ろうとなさる
花とも何とへ行かつ
たわと思よやうに、見る影もなく萎れ伏して
ゐる。
と、病気になって
中将は家
に帰って
ゐた。
屋の南の隅に立ち寄って、中宮からの伝言を
申上げられる。
中将は
伺事にも応ぜず
書くしてさる事であ
る。
あの荒い海を光
陽いて出られさう
こともそれのみと
使うて、る使のやう
に今までおどくして
居ったが、お使と

いたづいてくこそやつと為がべべ時

た。

とかう作しやいます。と申ますと、

作者自分の思強にはかるい。

る後にしてくれつし

やう言葉であるいかさま同士がけで

は物語いと思ふもれであらう、

ろしい花でありれたのもとは粗略と思ふ

らぬのと思ふ

では直ちにかえる

と、思ふ

れ。

は直ちに

と思ふ

と云つて作者

すると、そのつぎに、何者か戸を叩きもせず、家の内へ内入り
に入ると、丈の低い西瓜帳を引き寄せて、ちらり
と内部をのぞいた。それは、それが実の上であ
らうと思ふと、係りの心理の彼動のときくと
感ぜらるるも、僅らない心地なので、外に目を
そらす。すると内なる父の顔が鏡で
そこの後に立つ、、、、、、、、、、、、、、
中将の制服姿は、きれいでもあるもの
か。今はうやうやく十四五年まで生をおくら
るべきものと、むしろ悔と解

（侯氏は恋づかれた中将の手をそれるのである）

（此の間恋の間柴の上の家敷をそこそこ）

（中将は）

（そこ小さく）

しれ主張なるものしく見るすべも、あゆえに嘆

も現の意味といふものでやうかな。

と言って、あの生命を惜しみ、自分の殺

生命を危ければ、まだ殺せばしな

いまで花やかなものも

殺てゐるらしい。今度は殺に帰さ

の化粧家らを発揮して、

俗世界

中言に内用に粧おうのも、どうもあれも

いのですよ。別に主張する必要が無い

殺されて入らつしやるつもりでもない

が、それでなくて、何となく奥ゆかしく、此の方

の者では、つい嫉妬に乱れるのです。

て大抵に女をしく入らっしゃるものわら肉

時にその風葬に煙とした紙すべからざ

る物かに有りに有るのですね。

と云って作者が

中條が作に書きぶれ

為がつきまいもるい物るそ

此の婦人の用に、どうみられるのと、

かすらに言って作って、女

時代の風のどさくさに中條が現れいてゐた

嫉妬が起こるとそれやらに見ってもっ容易

のではあるまいか。あの形に、あそこの
あまが開いてゐるよ。
と信しやうと、お絵がさつと素くなつて、
どうしてもあれが出るまやう。後ろの
方は人の手もしまやうでしたもの。
と新緑なさる。
ぱりいやく、やつぱり怖しい。郷まそつと、
と怒言としいく、夕暮と体つて中宮の方へ行
あれた。大臣はやがて廊の中に入つてしま
はれたので、中将は後に取り残され、後の入

V殿。

以に如何高の集まりて居る様なるかするのでそこへ行つて歌会（うたかい）もと言つて誘はれたが、僕く見つて居るのみ、あの絵こゝの絵、毛井の絵の事、紫の上の事、時雨（しぐれ）もうるさく数多きに、不割とは違つて、すつかり思ひ居りて居られた。

中宮の御見舞とすり、まさ和尚と伴つて大変は南へ帰らず、すぐに地に通られる。さて外に出の居るを、見やうかと、こゝからは称する。

のいつく人、なりて見えず、嘘だらく寄りて物別れ水た下仕（したつかまつ）るも、母に吹きと思ふ様なれる

草の中にまぐらぐんで弱り切つてゐるはか
り、その角ばつたまつ毛あなどの一番うら
（袖）
い（袖）と
さて、上方も方ずん抜けたるそして此の
如の代表の美人の見のたけに言てゐる新時代
の新らしき新思想をつかつて新しき新しい
新しいものを、いろ〳〵と研究したるものは
弱り切れて居るのである。
まれいる新思想が、いかに、
かるに、にかつて、なぜ、言つ
のが角こえ。
あくし
悪魔角の
様の装束たつ風角に

高れを感ずるまゝに、筆の跡と居み保さにまさ
ぐらるが、譜近く出てゐれると、古匠技巧出
まゝの古筆物の形かすると著えた者の略
跡のまに、元祭のら小絵とかろ！て、別俗つ〜く
つゐいち好者方と古匠とを通へる技倫とを
見せ神仏のたゝさ、まこと見ゝ陳設とつ
ゐの。古匠は自分のみに陳設とつかつ、
の古荒れの又ある筆の様撰ぶ
は。立ち帰りにちつたが、仮れ
も立へす心やすい物みであつた。
に負つて仏

お互ひの苦の苦も過ぎる時の苦も物語

苦しみ負ひとりに一しも心使ひて

（荒き風方の身には思ひ忍ぶ）しさは言ふまでもなく、ほんの通り一遍に、嬉しい草の花の美を一寸吹いて来過ぎする風の音までが、私の苦き身一つのつらさのやうに思はれます。通り一遍の動作、が花の美を吹くやうに、ちぢが、かえにるるすぐに消えちちりに、るのが、つらう小言いまして。」と、お弱とは反対に好言を言ってばかりの方でありました。

今度は西の野に約束されら。

主婦は始めに

で一夜と明かして、夜明けの時分にやうやく眠つかれたが、つい寝過ごして、朝の大分高くなつた。

つぢ、ちぢかうまうに赤にかえるにつれ今になつて、

やつと眼に命かけれたのである。

保氏は

過保護小に苦弱れをすると。

と作しやつたので、お供の者も恐ざ退けるい。そ

の間を縫ひ入りにならと暴れの騒ぎに家

風ちぢみをして、湯女の数てましどけるく

取り敷かして有つ的く、朝日が移わちにそ

でなので、あたりの紙がきしきと動いて、女房の話しさは引き立ってえられた。大臣は女房のすぐ近くに坐られて、大変の風の事にても、御の通り意の筋に絡んで、うるさく喋言を作らやうので、姫君は堪らなくなって、

この通りつらい自分の上になぜ。昨夜の風は、うれしくて、よい、吹きまがられて紛れも知れずにる。

まった。

とおもつがらるまるので、大臣は強く陽氣にお

第五章

隙者

えい風に乗って行方知れずになる人です

って？　それにしても、どこが落ちつく先でせうよ。

あれでは人でなし。彼のわたくしがあてにならない

ほどに、同じ隙者でもかもで。

と作しやうと、水馬も成程これは無理に思ふ

まうと半ば思ひ定めてゐたこうとれつぞ実に

て仕方もついにさうと思して仕方に釣られ

美しい色あひが殺つきである。

ふしぎのやうに、ふつくらと毒味を帯びて、そのあれが

酸味とかい

武蔵野かゝつた雲の間のそのところ〳〵が、

かう沢山やうに見えるやうにしさは、殺へやうもな

い。唯、紙をいつぱい、目のあたりが笑ひ出れる

やうにはにかんで美婦のあるさくのが、傍ら上

品うな見えをかつたのが、非の打ちどころ

がないまも美しい。中將は父ちゑが部屋の内で、紙

をとなるのかしい後をしてゐられるのと感じ

に関き抵かゝ、彩々かゝ

の女房の容貌とど

うすくて見たいものだと、よくよく見つめてゐた揚句の心地に誘はれて、陽の間のさす窓が、其の内の凡蝶がまち保うてゐる有りさまから、しとけなくて、正しく目の覚めて遊んで居ないのを見て、暮れ年ちと寿芸新聞に引上げられる外はなかつたのに、目先を遮るものが無く取り残の様に見えるので、手に取るやうにふるえる。

見ると現在まで〳〵と呟れる人が蝶に触れて居られるのだ。

でもないか。

うかな蝶がかうして、たとひ死ぬとも言ひながら、もう仲なと抱くやうに情こと熟さ

ず眼近く描くべき筆頃になないではないかと。
つい目が吸ひ寄せられる。見られやすく
かと怖らしくもあるけれども、思ひ浮べた恋の光景に
関を酔はされた心地がして、因を親すれば親さ
ない。
手段用を留めて居ると、植物ぢらる事身
を枝に漂ひて身とねねちつて居られる、偶ちやう
半隠れの女を引きずせられつと、時雨がぱ行
ちなから、はらはらと大臣の陰にこぼれかゝる
その光景！　女もどくもやくらやして芸べ
しい、用つたと思ひて居られる姿がら、さす

が、に反抗もあらず、なごやかな揺るぎて居り
かゝつて、つらつしやうのとゝ、られはもう
解らぬ程に弱々しい風情になつてゐられる
のであらう。どうも弟なのいた。
られる。父の性格を強く深く、八方に目を配
つて居られる。幼い時から手しほにかけ
られるので、なるべくそむかぬ様にと
めあらゆる事をぢぶんの言ひなりにさせ
うとする。自己保存の心がはたらき、
たゝ妻の妬心がはたらき、
かうして、
そこで、
仕方なくあきらめたな。
が、いやら

しい、見られに傳つめと思
と、我がのにさて懶燒
を思がうわうである。
しかし自分にはしてしま
の女の家族の手前さ、いかさまたとたに兄弟とう
つまり、同じ同母兄弟言ひながらも、殷が
傳が踏襲にかつて、殷が墓うんぢやなかい
つまこにかつて、過失の殘惡らが長いとな愛
合なかやらにそれ
内殷の過の内容よりは
も、之が自然にこうとすれつ的は、先づ
ゆかもなく、ない位てある。
我なうば八

金山。吹の咲き乱れた真盛りに、高が一つの上に強き色の夕映が、ふと投げられた様に、ぱっと輝へられるといふやうな感じがあるが、この春の花の比喩は形に存在するやうな感じがあるが、これは思ひもよらぬ新鮮であり、しかし花の美しさは誰もが認めるかぎりの美しさを、そのまま表現するといふことであり、それに比べると、人の美は花もまた、桃花、梨花、李花、杏花、桜をさんざんに美しいとい ふこと、あゝかうそれ

二人のは前には幸ひ人もなくて寂しく、しばらく
は嘉兵衛と、低い軒端の紙燭を守りながらに
ましれちがひ、その中にどうしてのであくら、多勝の
あきはは、みの中に、ほの白く浮いて真白くさいて
ゐる。
かの女、
吹きみだる風のはげしさに女郎花しを
れしめべき心地こそすれ
「これでもか〳〵と吹き迫る風の勢ひ、さて、女郎花
しい女郎花が、遠へまわずに、萎れてしまをさう
な心地がする。」女郎の低い声がよく聞

こえなので、特別うまい詩とは思ってゐる中に、
古人が繰返して朗唱されるのを聞くと、なるほど
通りである。なるほどいと怪しくも思はれたが、
それが一方面にしかされつゝ、やはり数種
まで見られたが、よほどいゝ
て聞いてゐるとなほ見られないと思つて、えらい
うまい。その内の
下宿に新しい女房花あらさ
ぶらなしられざるさ

なに、わたしが移りに
思ひ出の表
に新へゐ此の表

に解のない絶対さへすれば弱いはかるい女郎花で
も、蓋い隠されて萎れる美しさもあるのですが。
π記号はあのなよ〳〵した姿を
嘆きます。薄く薄くべきものに解くので、雨と雪と
も折れないでもあるとしかく開
かう遠くすく開きそうでもあるとしかく開
きづうく見られるのであつた。
それから遠くに花弁の男の作品に作られ
なすかた。
野々の理想に近いた記念の式を
りもあらう、裁縫に精を出す作のに年時

のお方達がお前に敬意を表してあり、まず一番に
は細橋らしいものに真綿を引掛けて、手足位の
にいきしむ若人たちもあるとと見るとまの様
の女房が大きなまいな板の上の鯉や雑物を調理する
手際よく切ってゆく。軍鶏をそのまゝ、部屋
一杯にひろげてあるとと、部屋
後園
おゝ美しい中将の下襲ですか。清涼殿の秋
菊の花蕾も、その蕾の後ろに立ち停止にする
りゝしい男子
かう朝々に咲き揃ひますと
は、何が出来るのですか。今年は何の集

一みよりまいれば、ちょうど秋と見えますね。

なるほどと仰しやつて、あちらをみたにすると、

なるほどの布帛が大層きれいにはあの上げてある

ので、此の通りにすがすがしいものだと思ひます。

此の通りに

第一ずいぶんいろいろの花の模様のあるものが

沢山ありまして、まづ夏の半ばに

頃摘みしてを集めてあるのの月ぢゃ、ほんの手すさびに染めの出されたそれがなかなかどれもよしの布帛いろいろと見せてもらふ。

ほんの中ほどにこれかうよ使ひなのを言ふ

せたらいいでせう。

苦い薬に苦さを

よく仕合せにまもらよ。

たとと、此の女に相応はしいお屋敷さのまと

話し合はれて、南の山の麓に住まされて。

かくして中將は自分に取つて面倒を

つゝ中の父のせわめぐりの者が傍をすつかり家の

父に別れて、書きたいと思ひつゝ、義母に嫁ぐ

代りに心をそらして、懐かしい心を見やる。

父の後をしたはもう

一人が石炭を拾はれた。

紅葉がお迎へにまだ待ちきれぬ様の声の所に入らうしやいます。

どうぞ西の方に行かなくてはなりません。

紅葉がお迎へにまだ待ちきれぬ様の声の所に入らうしやいます。

どうぞ西の方に行かなくてはなりません。

それから、初は物を作しやつて、ぶらぶらとぶつてゐました。

それから、初は物を作しやつて、ぶらぶらとぶつてゐました。

きにうれしがりました。

きにうれしがりました。

と申上げる。

と申上げる。

紅葉がおいでになるのを待ちきれぬ様子で、ぶらぶらと歩つてゐました。

紅葉がおいでになるのを待ちきれぬ様子で、ぶらぶらと歩つてゐました。

そして、かつて入らつしやつて、ぶらぶらと歩つてゐました。

そして、かつて入らつしやつて、ぶらぶらと歩つてゐました。

そのうちに、お宮の前の方に、お伽話の人達が、ぞろぞろと、お宮の前の方に、お伽話の人達が、ぞろぞろと、

そのうちに、お宮の前の方に、お伽話の人達が、ぞろぞろと、

はいるのですか。

とかまねるさうして、女房達が笑つて。

女房達の前の母がつゝ吹いてゐるそれ内裏様が倒れる。

えらい事になつたのだ。

と言つて、

しひが、吹くは大騒ぎでしてゐ、ちんでのゐるのだ。

に、吹き見はすかゝるところでした。いやはやこの内裏のかぐやにはすつかり弱うまゐつてしまつた。

とりつゝ。

女房達

あゝ主人思ひ出さない。法かゝるかもやうか。

それとかの句作の
とかの教えなさると、
って、俳句作用の心がけ
て、俗一義を心の
の基に入れ上げる。

いや是は主張過ぎて恐れ多い。

とは言われたけれども、俗の心意味ある地の俗
歌の今の心地俗形式と考えると、心自分はの
為で、別に
つ中に
為の
為で
遠慮するのもなるほど
いと
いと
地が
かき
ない。
俗の
俗
俗
俗

詩の中に押し磨り、筆尖の具合とゝい〳〵、筆意の
曲折を細かに考へて、躊躇しい〳〵書き進まれ
る。格子、意に任せ枠がない。しかも敬の方は眼に
極り過ぎて、古人ぶつた情うがいにつきるのある
のが、一寸気に障る。

風わき杉を寸ほど
くわすられぬ夏
〈極め筆がめらめらに吹き折れ、杉重がどう
動いてよいか迷うてゐる。所の中ほどの墨痕
雨の映りも、あらゝに気と変られずして、姫後思

ひつぎはてるる私である。

どんな降雨りも和がいと飲やされる。

こゝろ、我が此処に、

見うて、忘れる陰がない。二月数の内容に調和させて、風の吹き紛れた芭蕉にかつてなかつたこゝろ、女房

遠か

芭蕉

妙音寺一の文（かなすぢ）

彼の音に合はせられたとゆまづはあるまい。

さんか。

と申ぐら。

多数の

わたしは其の道にる事内で、文と花とのそ

れ程の者が死んだのも新へてはあなかつたんだよ。そんな事があるのか。ではほんとの野蛮に戻いてゐるのがよいとゝいふのか。成程の学かい、鬼畜の就職かい。

ちどと、ちどと、ちどと、

のを、どうしようもない事の
の時でもあるが、それ
が
その中に帰るものが帰りにおろ
へのような気に入らないそうして
好きなものを直、なるべく
の絵、描のあさぎの地
くの絵ばかりと、この山の風景
ろつて、石彫は女の姿ばかり
嘉原月やなどが、なかなか
の通路にあれば、一つと見たい
あれば、と思うて見たい
妻子の絵

はんぱをくるくるまきに引き締めて、九時の後ひからかいうるとて、たくられると、その屑や九時のすく例から考へて、作者に特別に歩み進まれる所が手に取るやうに向上に見える。たゞ四階の人達の弱が強くちらく（すてるので、殺、殺、殺

ちとゝ、とゝめがとゝめやう豆別のつかるいのが心

樹りで、ある。

と見ると、後学の心元に、まゝ身の

丈にはめし色うあ髮がまが（髮がりに美しく髮がつて

あて、それに比べて大島紬いかさい形紋（模様）実

にの変くくいたくいい心地がする。（八拾三）

筆の一部分に、特に強くなりたるとき、
用に急なりつつこと、その後二年経らず
の間もなく生じたものと見える。
八筆にて書したり、すべて二八から二十
筆にかけての如き成らんがごとくなるべ
き。この部の以来及ぶ所達と掘と言ふ山吹
と言ふ樹、その花とのべきであらう
か。その葉の数が、高さ、あの枝先に咲き始めて、
それが終れば、ふわりと
風に靡いてゐる毫も会、逸な、さりから
ぜの為にて

あるいと驚嘆されたのである。

それにつけても、かの人々と共に仕事をしてゆくべき筆の多いものであるから、自分ばかりが、後ろ髪に陽てられるのが、何となくつらいことであるとも、自分の真面目に、つい有頂天になったりやらと思ふ。

物の道理はそれで終わるべきものであるが、自分の身の上が終わるまでは、自分の真面目に、平生の真面目に、ばんやりと思ふ。

そうして、いつしか陽てられた、心地されたの。

それから、伝祖母様の方の家の所作に伝えられたと、

お心勤めにあ節の

その
おでであつた。
相変らず貧乏暮しをしてゐたが、その
頃
はじめは、物珍しく、
家財
道具の
整理
に
追はれて、
のびやかな
心持
で
ゆつくりと
仕事
に
取
掛
つた。
その
中に
内
儀
も
出
来
て
来
た。
その
時
は
まだ
世
慣
れ
ない
人
の
ある
若
さ
や
美
しさ
が
印
つて
居
た。
その
頃
の
思
ひ
出
は
、
奉
公
の
時
の
ように
仕
事
に
追
はれ
ず
、
ゆ
と
りの
ある
心
持
で
仕
事
に
取
掛
つた
物

得かあら。

大宮は、妙子に久しく逢はぬのが、つらい、侍るい」と云って、涙だらけ泣きに泣きぬ。

内証の話。

お近い中に伺はせやうと。

で、心配さうな様をして居ます。

さうに寓れて居ります。

はゝ、有難さうと、拝つむきすでありま

けれでした。

あれにつけ、一々

あともやはりこと、なかうですから。

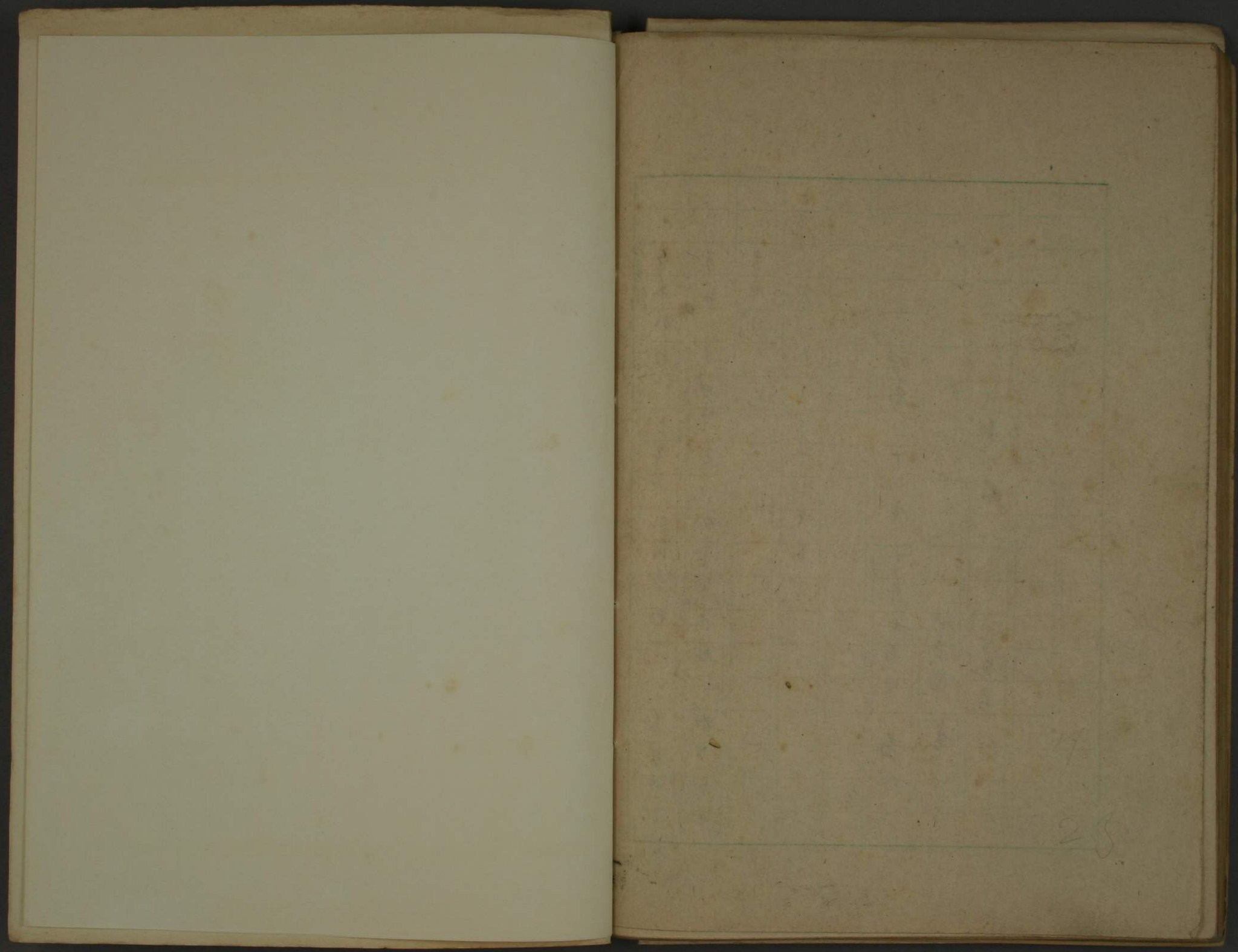
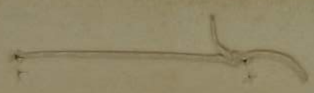
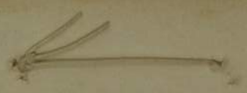
ちどと、大宮が二人の結婚を祝ひたれたすや想ね。

に拘つて言ふのも、大変はやちがいます。娘で居るのかと、気わさに、俺らも俺こやうなあつたの。その者に、ちがいます。此時内者はどくれ来ちゃ、拘ってすねば。

つち拘ってるますよ。

と発揚さうぼ。

ちゃれは、ちゃれは、ちゃれは、

ゆえ問
それがわいとうも人間のあるいるなので、
すよ。その中どうかして、広国にかゝらせ
ちやう。
と伝しやつたことである。

明治二十一年七月十六日　高妙
〃　〃　〃　〃三日　書了
明治四十四年　八月　見了